

Efforts for remote learning using our original teaching materials in a subject named “Methods in Adult Nursing I” during COVID-19

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 美和, 香川, 将大, 岡本, 佐智子, WATANABE, Miwa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.50818/00000091">https://doi.org/10.50818/00000091</a>

©東都大学2021

【実践報告】

## COVID-19禍でのオリジナル教材を活用した 成人看護学援助論Ⅰ（急性期）の遠隔授業の取り組み

Efforts for remote learning using our original teaching materials in a subject named  
“Methods in Adult Nursing I” during COVID-19

渡邊 美和 香川 将大 岡本 佐智子  
Miwa WATANABE Shota KAGAWA Sachiko OKAMOTO

### 要 旨

COVID-19の蔓延で、これまで大学構内で行っていた授業が遠隔授業に変更となった。著者らの担当する「成人看護学援助論Ⅰ（急性期）」でも、情報通信技術（ICT）や映像教材を活用し遠隔授業を展開したので報告する。

授業運営方法は、講義で話せる時間が短縮された分、小テストや課題などで補った。また技術演習に代わり映像教材を活用した。授業を評価するために、授業評価のデータを量的、質的に分析した。授業評価では、全ての項目において8割以上の学生が「そう思う」または「ややそう思う」と良い評価をした。授業への感想や意見としては【教員の説明が丁寧で分かりやすかった】【意欲的に授業に取り組める工夫がされていた】【映像教材が充実していてよかった】など13のカテゴリーが導かれた。遠隔授業の良さを活かし、授業の質を落とさず授業展開できたと考える。

キーワード：看護学教育、遠隔授業、アクティブ・ラーニング、成人看護学、急性期

### I. はじめに

2020年、COVID-19の猛威により教育の現場への影響は大きく、長期間の休校や、遠隔授業への急な転換を余儀なくされた。東都大学においても、緊急事態宣言の発令を受けて教職員、学生ともに入構禁止となり、5月からすべての科目が遠隔授業となった。教員は皆、短期間で慣れない遠隔授業を形作り、学生は自宅で、一人でパソコンやスマートフォンに向かって授業を受けることとなり、手探りの状態で授業を進めた。

東都大学幕張ヒューマンケア学部看護学科は看護学士4年制課程で、著者らが担当する「成人看護学援助論Ⅰ」は2年次前期の科目であり、周手術期や集中的治療を必要とする成人期にある対象とその家族に対する看護を学ぶことを目的としている。従来の教育法では、講義形式にて周手術期・急性期看護の基本的知識を教授し、演習形式にて周手術期の患者への看護過程、

看護技術を学ぶ構成となっている。演習では、グループワークを積極的に取り入れ、アクティブ・ラーニングを行っている。アクティブ・ラーニングの効果は、国内の看護教育においても実践・報告されており<sup>1)2)</sup>、一方向的に教員が知識を伝達するのではなく、グループワークを通して学生に書く・話す・発表するなどの能動的な活動をしてもらうことで、積極的に学習に参加してもらうことをねらいとしている。我々の授業では、まず少人数で学生同士話し合いをしながら、事例についての関連図、看護計画、看護技術の提供方法などを考え作成してもらい、その後グループの成果を発表し全体で共有する。そして看護技術の項目においては、グループで話し合って作成した技術を実施している。全体で成果を共有した後には、教員からよりよい看護過程、看護技術を導くための助言や解説をする。この授業展開では、グループワークで学生同士、能動的に討議を交わしながら考えを広げられるという利点がある一方で、グループ内で積極的に取り組む学生とそうでない学生の差異が大きく十分に学べない学生が出ること、成果の共有や教員の解説が各学生の身につ

いでいるのか不明確であるという課題も、教員間の振り返りで挙げられていた。

COVID-19禍で遠隔授業となり本科目においても教授方法の変更を余儀なくされたが、海外では、遠隔授業の取り組みはすでに広がっており、その利点も示されている<sup>3) 4)</sup>。国内でも近年、情報通信技術（information and communication technology：以下ICT）を取り入れた看護基礎教育の試みが増えてきており<sup>1) 5) 6)</sup>。本学においても授業にICTを導入することは、これから時代に合わせた必要な改革であるといえる。著者らはこの状況を好機ととらえ、教育の質を落とさず、遠隔という方法での利点を活かしこれまでの課題を改善できるような授業を目指し、授業を展開、評価したのでここに報告する。

## II. 方法

### 1. 成人看護学援助論Ⅰの概要

成人看護学援助論Ⅰの到達目標は、①手術侵襲による生体反応と回復過程を説明できる、②周手術期過程（術前、術中、術後）に応じた看護を説明できる、③術後合併症予防のための看護を具体的に説明できる、④術後回復のためのセルフケア促進のケアを説明できる、の4つであり、本学のディプロマポリシーのうち「ヒューマンケアの理念に基づき、保健・医療・福祉チームの一員として貢献できる能力」と大きく関連している。本科目の4つの到達目標に近づくことで、ディプロマポリシーの下位項目である「看護の対象となる人々の健康維持・増進のために必要な専門知識・技能を主体的・継続的に学習できる」「保健・医療・福祉の分野における看護の役割と機能を認識し、看護専門職としての力を発揮できる基礎的能力を有する」という能力を身につけることにつながる。カリキュラム上の位置づけとしては、「看護専門科目群」のうち、「ライフステージと看護」の区分に該当し、2年次前期の必修科目である。

### 2. 2020年度成人看護学援助論Ⅰの授業展開

#### 1) 講義形式部分

講義形式の部分の内容は、周手術期看護の総論と各論、救命救急、看護過程などである。オンデマンド方式での講義動画配信となつたが、これまでのように1コマ90分の動画とすると、学生の通信環境に限界があること、集中して視聴できる時間を考慮して、「教

員向け遠隔授業ガイド（Ver.4）幕張キャンパス版」に基づき、1つの動画につき15分程度、全ての動画合わせて60分以内の動画となるよう作成した。また、授業の出席確認と、講義時間の不足を補うため、各コマに3つくらいの小テストや課題を入れた。学生が講義動画を視聴せずに課題だけを提出するという状況を避けるために、課題の内容は全ての動画を視聴しないとわからないようにするなどの工夫をした。

#### 2) 演習形式部分

遠隔授業になつても、一方的な教員の講義形式とならず、これまでのアクティブラーニングを可能な形で続けられるよう試みた。演習では、これまでグループワークでやっていた部分を個人ワークとし、看護過程の展開では胃切除術を受ける患者の事例についての関連図や看護計画を学生個人で作成してもらい、オンライン上で提出してもらった。看護過程の展開の後は看護技術の項目であり、ここでも看護過程の演習と同様の事例に対して看護実践する想定で、看護技術の方法や根拠など調べ提出してもらった。課題の作成は、word、パワーポイント、手書きなど、学生の取り組みやすい方法で行ってもらい、手書きの場合は画像で提出してもらった。各課題提出の翌週の授業では、提出された課題の中から要点がとらえられているものいくつか選び紹介しながら、大事なポイント、不足しがちな内容などの解説を行った。そして学生には、解説を聞いて再度自分の作成した課題を見直してもらい、赤や青など文字の色を変えて修正したうえで再提出してもらった。本学では、初めての遠隔授業の取り組みであり、事前の調査で通信環境が整っていない学生もいたことから、オンライン、双方向での通信では参加できない学生も出ると予想し、双方向での演習は行わなかった。

#### 3) 教材作成

##### (1) 学習ワークブック

本科目では、従来の授業方法の時から、担当教員が独自に作成した学習ワークブックを使用し演習を進めている。学習ワークブックは58頁であり、18頁分は本科目の演習に関する内容、13頁分は本科目や3年次の実習で使用する看護過程展開のための様式や実習記録の様式、27頁分は実習に向けた事前学習課題という構成になっている。演習に関する内容では、演習の目的・目標、スケジュール、周手術期患者の事例情報、各演習の課題内容などが記載されている。本科目は、学生が3年次に履修する「成人看護学実習Ⅰ（急

性期)」へと続く学習内容であり、この学習ワークブックを通して、本科目の学びが実習でも活用できる仕組みとなっている。遠隔授業となつても演習内容はほぼ従来と同じであったため、従来と同内容の学習ワークブックを活用することとし、授業が始まる前に郵送にて学生に配布した。各演習の説明は学習ワークブックを基に行い、学生には学習ワークブックの書式を使用して課題を作成してもらった。

## (2) 映像教材

遠隔授業となつたことで、これまで実習室にて対面で行っていた技術演習が出来なくなつたため、その代替として看護技術の映像教材を活用することとした。使用可能な既存の映像教材の情報を収集し、本科目で教授したい内容が不足している項目については、独自に教材を作成した。作成した映像教材は3本であり、内容は「術後1日目の患者の観察技術（約20分）」「術後3日目の患者の観察技術（約10分）」「術後1日目の患者への保清技術（約15分）」であった。科目担当教員が看護師役を演じ、シミュレーター人形を患者役とし、各技術を行っている動画に音声とテロップでの患者と看護師の会話、観察した情報、技術の解説を加えた。その他、「ナーシングチャンネル（株式会社東京サウンド・プロダクション）」「VISUALEARN CLOUD（医学映像教育センター）」より、周手術期看護技術に関する映像教材も8本使用した。

## 4) 成績評価

成績評価については、従来であれば終講試験を行い、試験を60%、記録物を40%という配点で評価していたが、156名を対象とした学内対面での試験は感染予防上実施困難であったため、実施しなかつた。授業の最後にオンライン上での確認テストを実施したが、厳密な監督下での試験ではないので、その点数では公平な評価ができないと判断し、成績評価には反映せず、受講生の知識の確認、復習の機会とした。したがって、遠隔授業での成績評価は、各講義の時間に実施される小テストの点数30%、演習での課題の提出状況・内容70%という配点で行った。

## 3. 授業評価方法

### 1) 量的評価

授業の量的評価は、教務課が実施した2019年度、2020年度の学生による授業評価データと、2020年度の成績評価データを用いた。授業評価は、「講義はシ

ラバスの内容が網羅されていましたか」「講義のテーマ・目的が理解しやすい展開になつてましたか」「講義内容は順序立てて説明され、その説明が分かりやすかったです」「教員の教授法（声の大きさ・話すスピード、話し方、板書・資料・スライド等）は適切でしたか」「教員自身の意見や考えを適切に示すなど熱意が感じられましたか」「講義の内容は理解できましたか」「講義を受けて満足しましたか」の7項目の質問に対して、「そう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答してもらった。データはSPSS (ver.27) を用いて、記述統計を行った。また、授業評価データは「そう思う」と回答したものとそうでないものに2分し、Fisherの正確確率検定により2019年度と2020年度を比較した。有意水準は $p < 0.05$ とした。

### 2) 質的評価

授業の質的評価は、2020年度の授業の終了後に、科目担当者である著者らが受講生に対して実施した授業アンケートのデータを使用した。アンケートは無記名式で、「本講義・演習について、勉強になったこと、わかりにくかったこと、印象に残ったことなど、ご意見・ご感想を教えてください」という質問に対し、自由記述式で回答してもらった。データは以下の手順で質的帰納的に分析した。まず自由記述データの中から、授業に対する感想や意見に関する記述を抜き出し、それぞれ簡潔な1文で表現しコードとし、さらに意味内容の類似したコードをまとめ簡潔に表現しカテゴリーとした。分析は、3名の研究者にて合意が得られるまで検討を行った。

## 4. 倫理的配慮

学生が提出した授業評価やアンケートのデータを記載するにあたり、それらを実施した後に東都大学倫理審査委員会でその結果を論文に使用することの承認（承認番号RL0201）を受けた。倫理的配慮として、データの匿名性を保てるような記載内容とした。また、対象者は未成年の者も含まれており、いずれのデータも当初の目的外に使用するため、当該学生およびその保護者に対して、以上のデータを用いて論文作成すること、個人が特定されないような配慮をすること、データを用いることと成績評価は一切関係しないことを、大学ホームページに1ヵ月間掲示し、問い合わせ先を明記した。また、ホームページの掲示を確認してもらえるように、該当学生に対してteamsでも通知した。

### III. 結果

#### 1. 授業実施の概要

2020年度2年次「成人看護学援助論Ⅰ」は、2020年5月14日～9月3日の期間で、2単位31コマで実施され、履修者は156名であった。教授方法としては、講義形式が11コマ、演習形式が19コマ、テスト形式が1コマであった。

#### 2. 量的評価

##### 1) 成績評価

2020年度「成人看護学援助論Ⅰ」の単位取得者は151名（全履修者の96.8%）であり、単位取得者の評点の平均は74.1点、最高95点、最低60点であった。

##### 2) 授業評価

2020年度「成人看護学援助論Ⅰ」の履修者156名のうち、授業評価に回答したのは55名（35.3%）であり、2019年度は同科目の履修者106名のうち授業評価に回

答したのは96名（90.6%）であった。各質問項目と回答結果を表1に示す。「そう思う」と回答したものとそうでないものに2分し、Fisherの正確確率検定により2019年度と2020年度を比較すると、「講義の内容は理解できましたか」の項目のみ「そう思う」と回答した者が2020年度で有意（ $p=0.042$ ）に少なかった。

#### 3. 質的評価

2020年度授業アンケートに回答したのは60名（38.5%）で、自由記述から得られた、授業に対する感想や意見に関するコードは90であり、13のカテゴリーに集約された（表2）。以下、カテゴリーは【】、コードは〔〕、各カテゴリーの基となったコード数は（）で示す。

コード数が最も多かったのは【周手術期看護について学びの多い授業だった】（24）であり、【術後合併症予防には早期離床が重要である】【術前看護は術後、患者が安心して退院を迎えるために指導していく必要

表1 2020年度および2019年度「成人看護学援助論Ⅰ」の授業評価

質問項目	年度	そう 思 う	思 や う や そ う	普 通	思 わ な い そ う	思 わ な い そ う
講義はシラバスの内容が網羅されていましたか	2020	32名 (58%)	17 (31)	6 (11)	0 (0)	0 (0)
	2019	65 (68)	20 (21)	11 (11)	0 (0)	0 (0)
講義のテーマ・目的が理解しやすい展開になっていましたか	2020	32 (58)	15 (27)	8 (15)	0 (0)	0 (0)
	2019	58 (60)	25 (26)	12 (13)	1 (1)	0 (0)
講義内容は順序立てて説明され、その説明が分かりやすかったですか	2020	30 (55)	16 (29)	8 (14)	1 (2)	0 (0)
	2019	60 (62)	23 (24)	13 (14)	0 (0)	0 (0)
教員の教授法（声の大きさ・話すスピード、話し方、板書・資料・スライド等）は適切でしたか	2020	30 (54)	19 (35)	6 (11)	0 (0)	0 (0)
	2019	61 (63)	20 (21)	15 (16)	0 (0)	0 (0)
教員自身の意見や考えを適切に示すなど熱意が感じられましたか	2020	33 (60)	14 (25)	8 (15)	0 (0)	0 (0)
	2019	64 (67)	20 (21)	12 (12)	0 (0)	0 (0)
講義の内容は理解できましたか	2020	26 (47)	19 (35)	9 (16)	1 (2)	0 (0)
	2019	62 (64)	20 (21)	14 (15)	0 (0)	0 (0)
講義を受けて満足しましたか	2020	35 (64)	12 (22)	8 (14)	0 (0)	0 (0)
	2019	63 (66)	19 (20)	14 (14)	0 (0)	0 (0)

2020年度 n=55 2019年度 n=96

があると思った】〔退院指導のパンフレットは患者に分かりやすいように工夫が必要だと感じた〕など周手術期の看護について様々な学びを得たことが具体的に示された。

【教員の説明が丁寧で分かりやすかった】(15)では、〔繰り返し教えてくれたので思い出すことができて分かりやすかった〕〔教員が実際に経験したエピソードを話してくれてとても分かりやすかった〕などのコードが含まれ、コード数は2番目に多く、受講生は授業での教員の説明を分かりやすいと感じていた。

【意欲的に授業に取り組める工夫がされていた】で

は、〔作成した食事のパンフレットを評価されたのが嬉しかった〕〔声の大きさや、強弱があり飽きずに集中して取り組むことができた〕〔授業冒頭の、教員のアイスブレイクの話や経験談は勉強の意欲が向上した〕など、様々な点で、学生が意欲的に授業に取り組めたことが示された。また、【演習の構成が工夫されていて学びやすかった】という意見もあり、与えられた課題を実施した後に、他学生の作成した課題を見ることや教員からの解説があったことで、自分の作成した課題を見直すことができ、学びが深まったことを示した。

表2 2020年度「成人看護学援助論Ⅰ」を受講した感想や意見のカテゴリーとコード

カテゴリー (各カテゴリーの基となっ たコード数)	コード (一部抜粋)
周手術期看護について学び の多い授業だった (24)	とても学ぶことの多い授業だった 術後合併症予防には早期離床が重要である 術前看護は術後、患者が安心して退院を迎えるために指導していく必要があると思った 退院指導のパンフレットは患者に分かりやすいように工夫が必要だと感じた
教員の説明が丁寧で分かり やすかった (15)	繰り返し教えてくれたので思い出すことができて分かりやすかった 解説がとても分かりやすかった 教員が実際に経験したエピソードを話してくれてとても分かりやすかった
意欲的に授業に取り組める 工夫がされていた (14)	作成した食事のパンフレットを評価されたのが嬉しかった 声の大きさや、強弱があり飽きずに集中して取り組むことができた 授業冒頭の、教員のアイスブレイクの話や経験談は勉強の意欲が向上した
演習の構成が工夫されてい て学びやすかった (8)	自分が作成した看護過程の課題の内容に不安があったが、次の授業の時に分かりやすい解説があり、書き方などを理解することができたので、よかったです 自分の課題と他者の課題を見比べ自分に足りない点を補いながら勉強できたので良かった
授業の資料が豊富で理解し やすかった (8)	学習ワークブックで色々な書き方や内容を知ることが出来た 毎回の講義資料が理解しやすかった 授業スライドが分かりやすく、今後も活用していくと思った
映像教材が充実していってよ かった (5)	遠隔授業でも、実際に看護技術を行なっている動画を見ることができて分かりやすかった 手作りの動画が楽しみだった 実技がないなか、他の教科と比較して映像資料の充実さを著明に感じた
遠隔授業であることの難し さを感じた (4)	実際に演習を行わないと難しい部分があると思った 遠隔授業は提出物が確認しづらかった
課題の内容が難しかった (3)	実習記録は、もう少し書き方や流れを知ってから自分で書くほうがわかりやすい
教員の授業への姿勢が好印 象であった (2)	丁寧に熱心に説明してくれた 上からものを指すのではなく学生の視点も考えた上で授業であった
遠隔授業であることの利点 を感じた (2)	遠隔授業のため何回も動画を見直すことができた 実際の演習の代わりにレポート課題を行ったことで文章力や語彙力が身に付いたと感じた
他領域の記録形式との違い に戸惑った (2)	他の科目の似たような課題では、本授業と書き方や内容が食い違っている部分があり、どちらの形式に沿って記録したらよいかわからなかった
提出した課題へのフィードバ ックが不十分だと感じた (2)	課題の返却がなかったため自分が提出した課題の内容が正しいのかが疑問だった
課題を円滑に進めるための 教材が不十分だった (1)	修正が多い時は記録用紙が足りなくなったため、もう少しページ数が欲しい

本科目では、独自の学習ワークブックや、教員の各講義スライドの資料を受講生に送付したが、【授業の資料が豊富で理解しやすかった】という前向きな反応が得られた。また、遠隔授業となったことで積極的に活用した映像教材についても、【映像教材が充実していてよかったです】という前向きな意見が見られた。【遠隔授業でも、実際に看護技術を行なっている動画を見てることができ分かりやすかった】と、対面演習でできなかつた看護技術を映像教材で補うことができたことが示された。また、【手作りの動画が楽しみだった】という感想もあった。

遠隔授業となったことに対する評価は、【遠隔授業のため何回も動画を見直すことができた】のようにその利点を感じた学生がいた反面、【実際に演習を行わないと難しい部分があると思った】など困難を感じた学生もいた。

受講生が困難や不満足を感じた内容としては、【課題の内容が難しかった】(3)、【他領域の記録形式との違いに戸惑った】(2)、【提出した課題へのフィードバックが不十分だと感じた】(2)、【課題を円滑に進めるための教材が不十分だった】(1)などが見られたが、コード数は各1～3と少數意見であった。

## IV. 考察

### 1. 従来の授業との比較

十分な準備期間なく遠隔授業に変更となり、授業の質を保つのは難しい状況であったが、授業評価では、2020年度の全ての項目において8割以上の学生が「そう思う」または「ややそう思う」と回答し、高評価を得たといえる。また、昨年度と比較して、ほとんどの項目で「そう思う」と回答した者の割合に有意な差ではなく、授業の質を保つことができた。「講義の内容は理解できましたか」の項目だけは昨年度と比較して「そう思う」という回答が有意に少なかった。これは、遠隔授業となったことで、昨年度よりも学生主体の学習が求められたため、主体的学習が難しかった学生の理解が十分ではなかったのではないかと考える。学生の感想や意見として、【教員の説明が丁寧で分かりやすかった】という評価も得られた。遠隔授業となったことで教員が話す時間は短くなったものの、それだけに重要なポイントをしっかりと伝えることに重点を置いて講義を展開したことが分かりやすさにつながったと考えられる。【術後合併症予防には早期離床が重要で

ある】【退院指導のパンフレットは患者に分かりやすいように工夫が必要だと感じた】など、学生が例年同様、本科目の目標達成のために重要な部分をしっかり学べたことを示すコードも多く見られた。成績評価に関しては、96.8%の履修者が単位を取得できた点では評価できるが、平均点が74.1点とやや低い得点であったといえる。遠隔授業では公平な試験が難しく、今年度の成績評価は課題の提出状況や内容で70%と、高い割合とした。グループワークではない、個人ワークでの課題提出は、しっかりできる学生と力不足の学生の差がついたことが、成績の平均点を下げた一因であると考える。しかし、従来のようにグループワークで学生同士意見を取り交わしながら学びを深める機会はなかったが、これまでの課題であったグループ内での学生の取り組みに差があるという課題を改善する効果はあったと考える。

### 2. オリジナル教材活用による効果

授業の教材については、従来使用していた学習ワークブックを遠隔授業になっても同じように活用できること、講義資料をできるだけわかりやすく作成したことで、【授業の資料が豊富で理解しやすかった】という評価を得ることができたと考える。そして、対面での技術演習ができなくなったことが本科目において最も大きな変化であり、どう補うかが重要なポイントであったが、本科目独自の映像教材を作成できること、既存の映像教材を十分活用できることで【遠隔授業でも、実際に看護技術を行なっている動画を見てることができ分かりやすかった】のような前向きな評価を得ることができたと考える。江藤ら<sup>7)</sup>は、映像教材の有効性に関する研究で、学生がイメージ化しやすい、理解しやすいなど、今回の結果と同様の効果を報告している。また、先行研究<sup>8)</sup>では映像教材が学生の意欲向上にもつながるという報告がされており、今回の結果にある【手作りの動画が楽しみだった】から、オリジナルの映像教材が学生の学習意欲の向上にも効果があったと推察する。

### 3. アクティブラーニングの維持

従来行っていたアクティブラーニングができるだけ維持できるよう、受講生には自身で看護過程や看護技術の課題に取り組んでもらい、その成果に対する評価や解説を次の授業で毎回返すようにした。【自分が作成した看護過程の課題の内容に不安があったが、次

の授業の時に分かりやすい解説があり、書き方などを理解することができたので、よかった】【作成した食事のパンフレットを評価されたのが嬉しかった】という感想から、この演習方法は学生が意欲的に、主体的に学ぶことに効果があったといえる。これまでの演習では、グループ発表や教員の解説後の課題の見直しは各学生に任せていたため、我々は学生の学びが深まっているのか不明確であると感じていた。しかし今回は教員の解説後に、再度、自身の作成した課題を見直し、必要な修正をして提出してもらうというサイクルを取ったため、学生が自分の課題をしっかり見直すところまで確認でき、課題が改善されたと考える。

#### 4. 遠隔授業の特徴

遠隔授業になったことで学生はパソコンやスマートフォンに、長時間一人で向かって動画を見ることとなるため、集中力や意欲を維持することが難しいことが予測された。著者らはそのような環境でも、できるだけ学生が意欲的に、主体的に学べるよう工夫しながら授業を展開した。受講生からは【授業冒頭の、教員のアイスブレイクの話や経験談は勉強の意欲が向上した】【声の大きさや、強弱があり飽きずに集中して取り組むことができた】などの感想が得られ、学生の学習意欲を維持するという効果はあったと評価する。また、受講生は、【遠隔授業のため何回も動画を見直すことができた】【実際に演習を行わないと難しい部分があると思った】など、遠隔授業であることでの利点も困難を感じていた。授業の動画は聞き逃したら何度もくりかえり視聴することが可能であったため、一回で終わってしまう対面の授業にはない利点があった。また、今回の結果からは出てこなかったが、これまでの授業では、一緒に受講している他の学生同士の授業と関係のない会話で授業に集中できないなどの意見が聞かれたこともあり、この点では他者の行動に影響されることなく授業に集中できたのではないかと考える。また、授業時間以外でも、学生はチャットなどの手段で教員に気軽に質問が可能なためか、昨年よりも学生からの質問が多く、遠隔授業ならではの利点であったといえる。

#### 5. 本研究の限界

本研究では、2020年度の授業評価の回答率が低く、履修者全体の授業評価として扱うには限界がある。また、回答した履修者は、授業に対して積極的に取り組

む学生かもしれないというバイアスも考えられる。

#### V. 教育の質向上への寄与と今後の課題

これまでICTを駆使して授業を展開する経験がほとんどなかったが、遠隔授業に変更となったことで、授業にICTを取り入れるための技術が格段に上がった。また、これまで学生の技術発表に対して教員が口頭で解説していたが、本授業では教員が技術の見本を示しながら要点を解説する動画教材を作成し、活用することができた。次年度以降、対面の授業に戻った時にも、これらの技術、教材を活用することで、さらに授業の質を向上させることができると考える。

今後の課題としては、ICTを活用するために、学生が授業に参加するための通信環境を整え、オンライン双方向での演習を可能にすることが必要である。また、少数意見ではあったが【提出した課題へのフィードバックが不十分だと感じた】という受講生もいた。本授業の履修生は156名であり、提出された毎回の課題に対し個別にフィードバックすることは時間的に難しかったが、個々にフィードバックできるような方法を模索していきたい。

#### 利益相反

開示すべき利益相反はない。

#### 文献

- 1) 栗原律子：在宅看護論演習におけるeラーニングシステムを活用したアクティブ・ラーニングの授業成果. 保健福祉学部紀要. 12, 35-40, 2020
- 2) 玉川優芽, 福間美紀, 宮本まゆみ ら：アクティブ・ラーニング型反転授業を導入した基礎看護技術演習科目の評価とその課題—車椅子移動単元科目における中間評価—. 島根大学医学部紀要. 42, 41-46, 2020
- 3) Chipps J, Brysiewicz P, Mars J : A systematic review of the effectiveness of videoconference-based tele-education for medical and nursing education. Worldviews Evid Based Nurs. 9, 78-87, 2012
- 4) Freeman S, Eddy SL, McDonough M, et al. : Active learning increases student performance in science, engineering, and mathematics. PNAS. 111 (23), 8410-8415, 2014
- 5) 並川浩己, 竹本恭彦, 竹重友美 ら：看護学生1年生に対する情報通信技術を活用した事前授業とシミュレータ演習を合体したブレンド型授業導入の試み.

- 日本プライマリ・ケア連合学会誌. 40 (4), 192-194,  
2017
- 6) 山住康恵, 櫻井美奈, 中村昌子 ら: プレンディッド  
ラーニングを用いた基礎看護技術の授業を試みて—  
ベッドメイキングの単元を事例として—. 共立女子  
大学看護学雑誌. 5, 26-34, 2018
- 7) 江藤和子, 椎野雅代, 宮原舞子 ら: 精神看護学に  
おける映像教材の有効性の検討 ビデオ教材の作成  
過程と評価. 日本精神科看護学術集会誌. 58 (2),  
244-248, 2015
- 8) 吉澤隆志, 松永秀俊, 藤沢しげ子: 映像授業が学習  
意欲に及ぼす効果について. 理学療法科学. 25 (1),  
13-17, 2010

受付日：2021年4月9日 受諾日：2021年5月30日

## [Practice Report]

# Efforts for remote learning using our original teaching materials in a subject named “Methods in Adult Nursing I” during COVID-19

Miwa WATANABE Shota KAGAWA Sachiko OKAMOTO

## Abstract

Due to the coronavirus disease (COVID-19) pandemic, the university classes that had been given on campus have been changed to remote lessons. In a subject named “Methods in Adult Nursing I” that the authors are in charge of at the school of Nursing, remote learning was conducted using information and communication technology and video teaching materials. The remote lecture time has become shorter, therefore, we supplemented the students’ learning by imposing quizzes and assignments. In addition, instead of conducting on site skill training, video teaching materials were used. The data of the questionnaires answered by the students were analyzed by descriptive statistics and qualitative inductive methods. In a class evaluation, more than 80% of students gave good evaluations in all items, and the average score was almost the same as last year’s score. Thirteen categories were extracted regarding the impressions and opinions of the lecture, such as “The teacher’s explanation was thorough and easy to understand,” “The teacher helped the students to be enthusiastic,” and “The video teaching materials were substantial.” In this subject, We think that we were able to take advantage of the merits of remote learning and were able to teach without lowering the class quality.

Key words : nursing education, remote learning, active learning, adult nursing, acute phase

